

1 学力向上検討委員会構成

学 力 向 上 検 討 委 員		
	職名・校務等担当名	氏名
管理職	校長 教頭 教頭	田中敦子 野崎明美 嵩原真司
学力向上推進員	教諭（中学部長）	後山真吾
委員	教諭（小学部長） 教諭（高等部長） 教諭（教務課長） 教諭（研究課長）	中村加世 片山雄作 上田英見 今井光子

2 学力・学習状況における現状分析、目標等

【3つの視点】

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成
- (3) 主体的に学習に取り組む態度の育成

(小 学 部) 児 童 の 状 況			
よさ	毎日繰り返し行う活動や学習は、理解や定着が進みやすい。環境を整えることで、落ち着いて学習や活動に取り組むことができる。	課題	獲得した基本的な生活習慣や知識・技能を、学校生活の他の場面や担任以外の教員、家庭生活に般化することが難しい。
具体的目標(目指す子どもの姿)		成果指標	達成状況
身の回りのことや学習活動において、「できた」「わかった」という経験を増やして自信を持ち、色々な活動や学習に主体的に取り組むことができる。		低学年はAI-PACを活用して課題学習に関する目標を、中・高学年は日常生活チェックシートから生活に関する目標を、それぞれ前後期ともに各児童1つ以上設定する。その目標を達成した割合が、前後期ともに90%以上になる。	低学年は、AI-PACを活用して前期・後期ともに目標を設定して指導を進め、達成することができた。中・高学年は、日常生活に関する目標を立案し、概ね達成となっており、達成率も90%以上であった。
			評価 B
具体的方策(教員の取組)		取組指標	取組状況
低学年は、AI-PACを活用して一人ひとりに応じた課題学習の短期目標を設定し、指導実践を行う。中・高学年は、日常生活チェックシート(朝・給食・帰り)を活用して各児童の日常生活に関する短期目標を設定して指導実践を行う。		個別の指導計画において、低学年はAI-PACから、中・高学年は日常生活チェックシートからそれぞれ前後期の短期目標を1つ以上設定する。	個別の指導計画に、それぞれの課題に合わせた短期目標を設定して取り組んだ。低学年では、AI-PACと個別の指導計画を連動させる取り組みが初めてであったが、実態に応じた目標を設定し指導を進めることができた。
* 中間期の見直し			
なし			
達成状況を踏まえた改善事項			
中・高学年において、日常生活の指導に関しては、チェックシートを活用することで実態把握や目標設定がしやすくなったと考えている。そのため、次年度は全学年で課題学習に関する取り組みを行っていきたいと考えている。今年度、低学年で行った取り組みでは、初めてのことで負担を感じる部分もあったと思われるため、それを改善しながら課題学習の指導の充実を図っていききたい。			

(中 学 部) 生徒の状況			
よ さ	・障害種別や程度の混在するクラス集団が編成され多様な友だちとのかかわりが持てる。 ・各教科等において構造化された学習環境下では理解が進みやすく、学習への参加意欲も高い。	課題	各教科等で得られた知識や技能を他の学習場面や人、家庭生活(社会生活)で発揮することが難しい。
具体的目標(目指す子どもの姿)		成果指標	達成状況
自立活動の時間における指導で身につけたスキルを他の学習場面や家庭(社会)生活で発揮することができる。		自立活動における教員アンケートの各項目が昨年度より「たいへんよい」「よい」の肯定的な評価が5%以上増える。	研究課が実施した昨年度アンケートに比べ、肯定的な評価が5%以上増えた。個別の指導計画における般化場面の設定がほぼ100%できた。
			評価 B
具体的方策(教員の取組)		取組指標	取組状況
生徒個々の中心課題に基づく自立活動の学習システムを体系化して実施する。またスーパーバイザーからの助言を受けながら行う。		自立活動の各グループにおいて授業検討を行い、学部全体での報告会を年間2回程度行い、自立活動における指導の改善を実践する。	研究課が主導し、学習システムの体系化を進めることができた。各グループ毎に、報告会を2回実施し活動内容や進捗状況について情報共有できた。スーパーバイザーによるコンサルテーションを活用できた。
* 中間期の見直し なし			
達成状況を踏まえた改善事項			
自立活動の時間における指導の運用システムを構築できた。今年度のシステムを適正に運用するため本格的に実施し、適宜、検討・改善を図る。継続してスーパーバイザーからの助言を受けながら行いたい。また、他学部とも情報共有しながら学校全体として取り組める方策を検討したい。			

(高 等 部) 幼児児童生徒の状況			
よ さ	学校生活全般において、学習活動に意欲的に取り組む生徒が多い。	課題	社会に出ることを間近に控えており、社会生活で必要とされるスキルの獲得が急がれる。また、学習内容が定着しにくい生徒が多く、繰り返し学習の場を設定することが必要とされる。
具体的目標(目指す子どもの姿)		成果指標	達成状況
社会で必要とされる力として、「あいさつ」、「報告、連絡、相談」、「援助要求」などのコミュニケーション能力の向上に取り組むことができる。		「個別の指導計画」において、コミュニケーション能力や社会性の育成に関する項目の目標を達成した生徒が90%以上となる。	コミュニケーション能力・社会性の育成に関する項目の評価に向上が見られた生徒は、91%であった。
			評価 B
具体的方策(教員の取組)		取組指標	取組状況
生徒一人ひとりの特性を把握し、実態に合わせて、指導内容や方法を検討する。また、自立活動の授業では、意識付けやトレーニングを行い、作業学習や就業体験で般化できるよう支援する。		生徒の実態に応じた、コミュニケーション能力や社会性の向上に関する項目を「個別の指導計画」の目標として設定する。	実態に応じたコミュニケーション能力・社会性に関する項目を設定することができた。また、コンサルテーションを活用しながら、よりよい授業を展開できるよう取り組んだ。
* 中間期の見直し なし			
達成状況を踏まえた改善事項			

実態に応じた指導をさらに進めていくために、習熟度別に学習グループを作るなどの工夫をしたことで、達成状況が向上した。今後、教員間(特にコース内)で生徒の実態について情報共有を図る機会を設け、授業力向上のための意見交換や学部研修の機会を設定したい。これらの取り組みを行いながら、評価の達成状況を維持していきたい。

